

地球時代の選択肢
南アフリカに移住した家族
吉村 稔・吉村 峰子 (南アフリカ・ダーバン在住)



第 64 回

20 年がもたらした小さな奇跡

私たち家族が南アフリカのダーバンに到着したのは 2003 年 12 月でした。従い 2023 年は私たちがダーバンに来て 20 年目という節目の年になります。

残念なことに夫・稔は 2010 年に不慮の事故で亡くなりました。

彼の旅立ちはあまりにも突然で、亡くなった直後の数年間はただただ無我夢中でそれまでの生活を続けていくしかなかったのです。子どもたちはそれぞれまだ高校、大学に通う学生でした。私は稔と一緒に経営していた会社を一人で維持していかななくてはいけなくなり、彼の得意としていたバイクや車の輸出入などの事業からは撤退するしかありませんでした。彼の死後、彼が長年かけて実現させようとしていた、日本最大大手の中古バイクの販売会社からの、「南アでの事業を共同経営したい」という申し出を断るのは断腸の思いでした。

ただそんな仕事の面よりも、子どもたちにとっては、稔のように子どもの全部に関わってきた父親が突然いなくなる、ということは、精神的にどれだけつらかっただろうと思います。

それでも、私たちはアフリカで生活することを選択しました。

なぜでしょう。

夫と私は、誰かの人生の「不公平・不平等」を目の当たりにしたら、それに対して何か行動を起こさなければならない、という思いを若い頃から抱いていました。「不公平・不平等」など、掃いて捨てるほどあふれている現代社会に私たちは住んでいます。これはアフリカに限ったことではありません。でも、私たちは、アフリカに縁を持ち、アフリカ各国で生活してきたからこそ、アフリカで起きている貧困、不公平、不平等を見て見ぬふりをするわけにはいかないと思ったのです。

私たちに何ができるのか、と考えました。

目的はシンプルで明快でした。例え最初は少なくとも、数人のために雇用を作り、その収入によって、彼らの家族が安全な環境で生活し、食卓に食べ物を並べ、子どもたちを学校に通わせることができるようする、ということです。

私たちは自分で自分たちの非力さを十分認識しており、社会全体を変える力はないと自覚していました。しかし、私たちが安定した雇用を提供することで、一部の家庭に希望を持たせることはできる、と思ったのです。

アフリカで実施されている日本政府の開発プログラムに 20 年以上携わってきた私たちが 個人レベルでできることとは何か、という挑戦です。

私たちができることで自分たちと彼らを支え、それを 10 年、20 年と持続させることができれば、少数の家族にとってのゲームチェンジャーになれるのでは？と考えました。

しかしこれは、住む場所をアフリカに問わずとも、安定した収入を得て安全な環境を手に入れることが、すべての人にとって幸せな人生にとって重要なことだと今更ながら実感しています。

コロナ渦のせいで中断していた従業員の家族のためのプールパーティーを 3 年振りに開催することができました。子どもたちの食事のリクエストは、寿司、ピザ、ミートボールなど。デザートに 5 リットルのアイスクリームと巨大なスイカも用意しました。まぎれもなく、この日の子どもたち、ダーバンで一番おいしいお寿司を食べている！とかなり興奮していました。

そのパーティーで一歳の女の子の面倒をみている 13 歳の少年がいました。彼の名前はスバニ。彼のことは生まれたときから知っています。

この一歳のアマンダという赤ちゃんは、不幸にも母方の祖母に殺されそうになりました。彼女の祖母が、彼女の世話をしなくて済むようにと、生後半年の彼女を毒殺しようとしたのです。スバニとアマンダは遠縁にあたります。

多くの社会で大人の都合で若い命が抹消される現実があります。日本でも少し前まではそうでした。特に赤ん坊が女性性を持つならなおさらでした。



あまりも幼くそんなことは知りようもない彼女ですが、肉親に殺される直前だったアマンダ。現在は、彼女の叔母にあたる女性たちが大切に彼女を育てています。

そして、その彼女に示したスバニの気遣いは本物でした。優しく抱っこし、話しかけ、食事を手伝っていたのです。スバニ自身が、シングルマザーである彼の母が提供してきてくれた食事や教育、そして何より家族を助けるという、ズルーの伝統的な思いやりを与えてくれる安全な環境で育った少年です。



大げさなようですが、それができたのは、彼の母親が過去 17 年間、私たちと一緒に安定した仕事をしてきたこともその一助となっているのではないのでしょうか。

もちろん、スバニの穏やかで思いやりのある性格は彼の素晴らしい個性です。しかし、20 年前の私たちの志が、彼の育つ環境を守ってきたのでは、と胸が熱くなりました。

スバニの母親は、何の技術もなく、英語もろくに話せない状態で私たちのところにやってきました。しかし、今では、繊細で美しい和のデザートを細やかに作ることができる、信頼できるキッチンスタッフの一員となっています。彼女は来月、運転免許の試験を受けることになっています。

さて、20 年。そうです、もう 20 年です。短いようで長い 20 年でした。

20 年かけて実を結びつつある私たちの挑戦。この穏やかで優しい少年の態度にそれを見ることができたことは小さな奇跡です。それは本当に小さな細やかな出来事でした。大げさな動作や言葉もなく、気がついていただけのも私一人でしょう。でも、その小さな宝石のような一瞬に私は涙が止まりませんでした。

こんな奇跡を見せてもらえる人生には感謝しかありません。